

## 事変と戦争 (誌上シンポジウム 危機と人間)

著者	中尾 健二
雑誌名	静岡大学情報学研究
巻	19
ページ	69-75
発行年	2014-03-28
出版者	静岡大学大学院情報学研究科
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00009227">http://doi.org/10.14945/00009227</a>

# 事変と戦争

## Incident and War

中尾健二

Kenji NAKAO

静岡大学名誉教授

nakaok@pf7.so-net.ne.jp

### I

一生命体としての人間にとって危機の意味は明確である。要するに生きるか死ぬかの瀬戸際ということだろう。危機を克服できなければ死んでしまう、つまり生命体であることをやめてしまう。逆にみずからに備わる、生き延びようとする力によって危機を脱したとなれば生命体としてとうぶん存続を保証されることになる。また心をもった存在としての人間にも危機は訪れよう。生命体の場合ほどはっきりしてはいないものの精神的に社会生活が困難になる境界があり、個人がそれを越えてしまいかねない時にそれを危機的と呼ぶことは可能である。ただし、個人と社会は相関的であり、両者とも可変項であるから境界といってもさほど明確なわけではない。また老人性痴呆のごときものを危機とか危機的と呼ぶことには違和感があるだろう。なぜなら、そこには岐路がない、そうしたものは生命体として避けがたい、老衰という緩慢な自然過程であると目下見なされることが多いからである。

ところで危機とか危機的という言葉は、しばしば社会と歴史に対しても用いられる。しかし、そこで危機とか危機的とはどういう意味なのだろうか。自然災害や疫病によって一定の社会集団が絶滅してしまうようなケースは、生命体と

のアナロジーであれば、それを危機とか危機的といってもいいような気がするが、そういう場合にはこの言葉はあまり似つかわしくないようである。なぜなら、そこには岐路がない、いいかえればそれを避けうる選択肢がないからである。むしろその結果を低減する、さまざまな予防手段を講じることは可能だが、ここでは無視しよう。したがって、一定の社会が危機にあるとか危機的といった場合は、悪しき結果が迫っているもののその悪しき結果を避けうる選択肢もまた開かれているという認識を前提に用いられているとしよう。しかもその悪しき結果は外からくるものではなく、まさに人間の行為の積み重ねから、社会の中から出現する。社会の有り様が危機を生み出すのである。しかし、現実の歴史を顧みるに、こうした明確な認識なしに悪しき結果を招きよせてしまうことが圧倒的に多いのではないだろうか。われわれはこれを破局モデルと呼びたい。希望を秘めた危機モデルの歴史ではなく、われわれは破局モデルの歴史を生きているとしかどうしても思えないのである。

### II

比較的最近のわれわれの歴史を例にとろう。今では日中戦争と呼ばれる一連の歴史過程は

1931年9月18日の柳条湖事件からはじまった。この日関東軍に属する板垣征四郎大佐と石原莞爾中佐は南満州鉄道(満鉄)の線路を爆破させ、これを中国軍側の仕業として満州(中国東北部)全域に兵をすすめ、翌1932年2月までに満州各地を占領した。当初不拡大方針をとった第2次若槻内閣も軍部との確執の末ずると既成事実を追認していくことになる。こうした軍部の動き自体は天皇の裁可を経ているのだからりっぱな「統帥権干犯」だと思いが、時には抜刀して文民政治家を「統帥権干犯」と脅すやり口はまったくご都合主義というほかない。そして早くも同年3月には愛新覚羅溥儀をかつぎだして満州国を建国、犬養内閣はこれを不承認とするも犬養首相が5/15事件で暗殺されてしまい、跡を継いだ斎藤内閣は軍部と世論に挟撃される形で9月についてこれを承認するにいたる。一面的な情報しか知らされていないとはいえ世論は軍部を支持、「中国全土を占領してしまえ」とか「これで景気がよくなるならなにより」といった声が圧倒的であったという。<sup>1</sup>破局にむかって坂をころがりはじめたわけである。

中国東北部に満州国という傀儡政権を樹立した日本は、つぎに中国全土を視野に入れはじめた。こうした中で1937年7月7日廬溝橋事件がおこる。日本の北平(北京)駐屯軍が中国軍の目前で夜間訓練を実施中に射撃されたという。実際のところ銃声と弾丸の飛翔音を聞いた程度のことであって損害はなにもなかったのだが、牟田口連隊長と一木大隊長はこの機をとらえて、桜井少佐と寺平大尉が城内で中国軍側の金振中隊長と交渉中であるにもかかわらず、中国軍に対して攻撃を開始したのである。完全に日本側の謀略である柳条湖事件とくらべるとこの事件は偶発性が高いが、内閣にも華北を日本の勢力圏にという下心があったのであろう、近衛内閣はこれを受けてすぐさま華北への増派を決定し、これによって日中全面戦争への道が開かれたのであった。問題なのはこの事件を起こした人びとの心理的背景である。江口圭一は次

のようにまとめている。

日本の存在、とくに帝国陸海軍の存在を絶対化する視野のせまい軍隊教育が、「必勝不敗」の「無敵皇軍」という優越感にこりかたまつた視野狭窄的な指揮官を輩出させたのである。かれらはまた、強度な中国侮蔑感情の持ち主だった。(中略)かれらは、中国軍は日本軍の敵たりえず、日本軍の前にひれ伏すべき存在である、と考えていた。そんな中国軍が日本軍に手むかってくるなどもつてのほか、と思いこんでいたのである。だから、とるにたりぬことでも「不法行為」「不法射撃」と逆上し、「一撃」をかませて「膺懲」しようとして突進した。廬溝橋事件は直接には、日本軍指揮官の思いがかりと浅はかさの産物、であったといえよう。<sup>2</sup>

ご存知の方も多いであろうが、一木連隊長はのちに一木支隊をひきいてガタルカナルに上陸、一個大隊の兵力で一個師団のアメリカ軍に突撃して部隊を全滅させ、牟田口連隊長は無謀かつ悲惨なインパール作戦を強行し、これまた部隊を壊滅させている。今では聞きなれない「膺懲」(ようちょう)という言葉が中国に対する日本の態度を象徴していよう。「征伐してこらしめる」というほどの意味だが、居丈高な様子がすけて見える。桃太郎の鬼退治でもあるまい。こうした指揮官の下に戦わされた兵士たちこそ浮かばれないが、それ以上にかれらの行為は日本全体を破局にむけて一歩すすめることになった。たしかに小さな危機の積み重ねはあった、つまり別の可能性はあったであろう。それを過小評価する気はないが、歴史の重力のおもむくところを変えがたいという印象をぬぐえない。坂をころがりはじめたら止まらなかったのである。

柳条湖事件からはじまる戦いを「満州事変」、廬溝橋事件からはじまる戦いを「北支(のち支那)事変」と当時は称した。形式的には宣戦布

告を経ない戦争ということのようであるが、戦争にしてしまうとアメリカからの輸入がストップしてしまうという便宜的な理由からでもあったようである。しかし、今から考えてみるとこの「事変」という新しい名称にはもっと深い意味があるように思う。

文芸批評家の小林秀雄は1940年8月に「事変の新しさ」という文章を公にしている。小林は、さまざまな東亜共同体論のごときが目下出てきているが、そんなものは全部駄目であるとし、秀吉の朝鮮の役を引証しながら、秀吉はすぐれた見識ゆえに大失敗したというパラドックスをここで述べている。生半可はもちろんのこと、いやそれどころか優れた理論や解釈でさえ、この新しい事態をとらえることはできないということなのだろう。小林は正体不明の「新しさ」に臨む覚悟を要請してこの文章を結んでいるが、<sup>3</sup>筆者はこんな風に考える。

日本および日本軍は正規軍同士の戦いで雌雄を決し、あとは占領地における過酷な統治と懐柔的な文化政策でなんとかなると思いこんだ。中国全土に横溢した「抗日救国」の気運を過小評価し、抗日パルチザン（ゲリラ）闘争の意味と力量をも過小評価していたのだ。それは、日本軍がこうしたパルチザン（ゲリラ）闘争の主体をも十把一絡げに匪賊と呼んで、盗賊や山賊の類として扱っていたことにもあらわれている。正規軍の捕虜さえ虐殺したのであるから、こうした人びとへの日本軍の扱いは想像にあまりある。戦いの凄惨さは、戦いの構図自体によってあらかじめ決定されていた。これが中国民衆の日本軍に対する憎悪をさらに煽り立てることになったのである。そもそもゲリラという言葉は、スペイン語で「小さな戦い」を意味し、19世紀初頭の世紀転換期にスペインに侵入したフランス軍に対するスペイン民衆の戦いを指していたのだが、その後ひろく用いられるようになった。この正規軍対民衆の戦いは、ゴヤの版画集『戦争の惨禍』からもうかがえるようにきわめて凄惨なものとなった。そもそも国際法上

の交戦規定を逸脱する性格をもっていたからである。と同時にこうした戦いがナポレオン戦争からベトナム戦争にいたるまで世界史を規定する意味をもったものとして登場してきたのである。したがって、「事変の新しさ」とは、けじめのない戦線拡大を指すと同時にこのような性格の戦いに日本が直面したことを意味する。「アジアの解放」という美名は当初から「抗日救国」の民族解放闘争によって堀崩されていたのである。

### III

この間の事情がひとりの人間の目にどのような写っていたかを見てみよう。その人間とは山口淑子である。<sup>4</sup>ここでは紙数の関係で彼女の自伝から二つのエピソードをとりあげるにとどめる。彼女は1920年2月中国瀋陽（旧奉天）近郊に生まれ、すぐに大きな炭坑のある撫順に移っている。父は満鉄顧問としてそこで満鉄社員に中国語・中国事情を教えていた。1932年4月に12歳で撫順女学校に入学、それまでの彼女の人生は平穏なものであったという。しかし、その年の9月に「その後いつまでも脳裏に焼きつき、いまでも夢に見る」<sup>5</sup>事件に遭遇する。柳条湖事件1周年ということであろうか、多数の抗日ゲリラが9月15日夜に撫順炭坑を襲い、数カ所の採炭所ならびに付属施設に放火をし、数名の日本人職員を殺害したのであった。彼女が真夜中に起こされてみると、その炎が夜空を真っ赤に染めていたという。翌朝自宅の窓から見える広場に苦力頭とおぼしき男が憲兵につれてこられ、広場の真ん中にある大きな松の木にしばりつけられた。その男は尋問されるものなにも答えない。憲兵はやにわに銃の台尻でその男の額を殴打し、額から血が胸をつたって流れた様を彼女は目撃する。

1932年（昭和7年）、12歳、物心つきはじめた女学生の私に残る撫順の色は、ポプラ並木の「緑」から「赤」にかわろうとしていた。

それは戦火の「赤」——あの夜の火事であり、拷問の広場の土であり、苦力頭の額からおびただしく流れた血の色でもあった。<sup>6</sup>

この出来事は楊柏堡（ヤンバイバオ）事件とも呼ばれている。抗日ゲリラが前夜の9月14日に楊柏堡村に泊まりこんで襲撃の準備をしたからである。関東軍撫順守備隊の大半が留守であった機会をねらったこの襲撃はゲリラ側からすると大成功であったといえよう。むろん事はこれではすまなかった。16日早朝に撫順守備隊は楊柏堡村近くの平頂山部落を包囲し、村民全員をゲリラ支援の疑いで平頂山の崖下に集め、機銃掃射で殺害、石油をまいて死体を焼却した。さらにその後その崖を爆破し、死体を埋めたのである。犠牲者数は400名から3000名まで巾がある。山口淑子はこの出来事を当時は知る由もなく、戦後撫順を再訪した折に正確に知ったとのことである。1948年に行われた中国国民政府軍事法廷で裁かれ処刑されたのは、炭坑所長の久保守ら民間人7名であって、この事件を起こした撫順守備隊の軍人たちではなかった。「事変の新しさ」とは、まずはこのような戦いの様相を指しているのではないだろうか。植民地経営はつねにそれに抵抗する勢力によって脅かされていたのである。

父も通敵の疑いで取り調べをうけ、すぐに解放されたものの撫順には居づらくなり、一家は奉天に転居する。中国では親交のある人間の子女を形式上の養子とする習慣があるようで、13歳の山口淑子はこの奉天で李際春將軍の養女として「李香蘭（リーシャンラン）」の名前をもらう。満州国を不承認とした国際連盟から日本が脱退した年（1933年）、肺浸潤のためしばらく学校を休学し、その後呼吸器をきたえるため、ロシア系オペラ歌手マダム・ポドレソフについて彼女は歌曲の訓練をうけはじめる。このマダム・ポドレソフのコンサートの前座に歌ったことが目にとまったか、奉天放送局にスカウトされ、「満州新歌曲」の歌手として李香蘭の

名前でデビューする。こうして中国における日本の文化政策に彼女は取りこまれていくことになる。

翌年（1934年）5月から父の意向で北京に留学。父は彼女を政治家の秘書かジャーナリストにしたかったらしい。政治家潘毓桂（パンユグエイ）の養女・潘淑華（パンシュウホワ）として翊教（イイチヤオ）女学校に入学する。良家の子女がかようこの学校はミッション系でかなりリベラルな気風にあふれていたようである。このころ抗日の気運は北京でも高まり、この学校も例外ではなかった。

授業をボイコットして小さな政治集会を開き、演説する生徒もいた。満州から南下し華北地方を席卷しようとしていた日本軍に対する抗議集会は活発に行われた。「共産党と国民党が争っている時期ではない。挙国一致で東洋鬼子（日本人）を排撃しなければならない」と叫ぶ声に、私は黙ってうつむかざるをえなかった。<sup>7</sup>

1935年12月には12/9運動と呼ばれた大規模な学生による抗日デモが北京で行われた。山口淑子は日頃そうしたものを避けるようにしていたのだが、1936年のある日親友の温貴華に中南海公園でのパーティに誘われる。ふつうのパーティだと思ってついていったのだが、どうも雰囲気がちがっていた。

いつもの中南海公園は、丁香花の甘い香りが繁みにただよってロマンチックな雰囲気だったが、この日は重々しい空気がみなぎっていた。テーマは深刻だったが、参加者の表情は熱気を帯びて、全員が燃えていた。おそらく私だけが浮かぬ顔をし、うつむきかげんだったと思う。

リーダーの工作員が問いかけた。「日本軍は偽満州国をでっちあげ、東北地方からこの北京にせまってきている。もし日本軍が北京

の城壁を越えて侵入してきたら諸君はどうするか」

各々が立って意見を述べだした。「城壁の中には一人の日本兵も入れさせない」「死ぬまで戦うぞ」などの声が上がった。「しかし戦うといっても学生には鉄砲もなければ弾薬もないではないか」

すると「僕は南京に行き国民政府軍に志願する」という学生もいれば「僕は陝北の共産軍に参加する」と叫ぶ学生もいた。

全員が興奮した面持ちで決意を語った。温貴華は地方で地下工作をしている燕京大学学生のボーイ・フレンドと行動をともにするつもりなのだろう。「パルチザンに参加する」との決意を表明した。

私の順番がまわってきた。さきほどから、自分の答えを用意しておかなければならないと気ばかりがあせって、考えがまとまらなかった。まとまるはずがなかった。祖国と故国が戦おうとしている、両方の国と人々を愛する私はどうすればよいのか。

とうとう私の番がきて、司会者が眼で回答をうながした。

「私は・・・」と言いよんどんでから、「私は、北京の城壁の上に立ちます」と答えた。<sup>8</sup>

そうすれば、どちらかの弾にあたって真っ先に死ぬだろう、それが自分にとってふさわしい身の処し方だととっさに思ったそうである。この翌年盧溝橋事件が起き、日中は全面戦争に突入していく。翌々年山口淑子は、ほとんどだまし討ちに近い形で満州映画協会（満映）にスカウトされ、女優としての道をあゆみはじめる。歌が歌えて完璧な北京官語が話せる人材が必要とされたのである。こうして彼女は「李香蘭」として日本の対満・対中文化政策の花形的存在になっていくのである。18歳のときであった。

#### IV

とはいえ李香蘭主演による初期の作品は、他

愛ない安直なものだったようだ。新婚夫婦の寝台列車での一夜を描いた、第一作の『蜜月快車』（1938）からして日本でヒットした日活の『のぞかれた花嫁』（1935）のリメイクで、ハリウッド・コメディの模倣のような作品であった。なんといっても李香蘭の名前を日本で高めたのは、1939年から翌年にかけて公開された「日満提携」の大陸三部作、と呼ばれた『百蘭の歌』『支那の夜』『熱砂の誓い』であった。いずれも長谷川一夫・李香蘭コンビによる甘いラブ・ロマンスなのだが、ここでは国と国、国民と国民との関係がジェンダーに投影されている。やさしく親切な日本人男性（支配するもの）に中国人女性（支配されるもの）が惚れるというパターンを踏襲しているのである。日本では大好評であったものの中国では観客の反発をかかった。人心掌握としては、日本では人びとの大陸熱に油をそそぐ効果はあったろうが、中国では完全に裏目にてたわけである。軍事侵略に甘い衣をきせたところで、中身の苦さを消すことなどできない。山口淑子自身こう書いている。

『李香蘭 私の半生』を書くときに大陸三部作、を初めて見ました。撮影の当時はスケジュールに追われて、三本とも見ていません。

見終わった後、私の愚かさ、無知が口惜しくて涙が止まらず、三日三晩眠れませんでした。『熱砂の誓い』では、いま聞いてもうまい中国語で、中国の民衆を前に、対日協力の大演説をぶっています。

（中略）

私はまだ、自分で自分を分析しきれないでいます。<sup>9</sup>

ただ、レコード会社は大ヒットした挿入歌「支那の夜」の吹き込みを再三依頼してきたようだが、彼女はこれを断っていることだけは付言しておこう。「中国の人々は枝葉を意味する「支」という文字で祖国が呼ばれていることに怒りを

抱いていた。私はそれを知っていた」<sup>10</sup>からである。

李香蘭が真の意味で全中国的な女優としてみとめられるのは、1943年の『萬世流芳(ワンシーリウファン)』をまたねばならなかった。この映画は中華電影と満映の第一回協同作品であったが、スタッフ・キャストはすべて中国人で占められ、アヘン戦争時代の反英闘争を描いたものであった。中華電影の川喜多長政の功績だろうが「反英」ということで企画をとおさせたのだろう。ところが中国人は「反英」を「抗日」と読み替えて鑑賞していたわけである。この映画は重慶でも延安でも観られていた。とくに劇中で李香蘭の歌った「売糖歌」は全中国的に流行したそうである。この曲はややコミカルな曲調と歌詞をもちながらアヘン吸飲をいましめるもので、飴売り娘に扮した李香蘭のソプラノの歌唱力をもいかに発揮させるものだった。

四方田犬彦編の『李香蘭と東アジア』の巻頭には、この映画の日本向けポスターが収録されている。<sup>11</sup> そのキャッチコピーにこうある。「中国と満州と日本とが映画によって結ばれた！打倒英米を誓う大東亜国民が、今上海に熱狂的絶賛を捲き起こしてある」と。そんなことはさらさらなかった。一本の映画をめぐって、日中における観客層の受容の落差は相当なものであった。これがもうひとつの「事変の新しさ」といえようか。この落差がつくる傾斜を日本は1945年8月15日の破局にむかってころがっていったのである。敗戦直後、ソ連軍の新京侵入の報をきいて青酸カリをあおいだ甘粕満映理事長の辞世の句は「大ばくち もとも子もなく すってんてん」と伝えられている。<sup>12</sup>

時をやや遡るが、1944年秋に意を決して満映退社を申し出た山口淑子に対して、甘粕は意外にあっさりこれを受け入れ、こう語ったそうである。

よくわかりました。長いあいだ、ご苦労さまでした。(中略) 満州国や満映はどうなる

かわからないが、あなたの将来は長い。どうか自分の思う道をすすんでいってください。<sup>13</sup>

永訣のトーンがあり、甘粕はすでに敗戦を予期していたのかもしれない。そのときかれの机上におかれた本が山口淑子の目にとまる。岩波新書の『アラビアのロレンス』だった。むろん甘粕が「中国のロレンス」になったわけではない。かれは最後まで日本の元憲兵大尉であったし、日本の傀儡国家満州国における闇の支配者であった。しかし、かれの心の片隅にそうした思いが兆したとしても不思議ではない。満映の機材や技術は戦後中国に引き継がれたのである。

## 注

1. 川田稔『満州事変と政党政治 軍部と政党の激闘』講談社、2010年、25頁以下参照。  
『大陸にあがる戦火(昭和2万日の全記録)』講談社、1989年、290頁以下参照。
2. 江口圭一『廬溝橋事件』岩波書店、1988年、40頁。本文中に付されたルビは省略した。
3. 小林秀雄全集第六巻、新潮社、1955年、2～17頁。
4. 山口淑子は三つの自伝的な著書を上梓している。藤原作弥との共著『李香蘭 私の半生』(新潮社、1987年)、『戦争と平和と歌 李香蘭 心の道』(東京新聞出版局、1993年)、『「李香蘭」を生きて』(日本経済新聞出版社、2004年)である。以下の記述は、史料的にもっとも充実している最初のものに主に依拠する。以下頁数はその新潮文庫版(1990年)である。
5. 『李香蘭 私の半生』、17頁。
6. 同上、20頁以下。本文中の漢数字をアラビア数字に改めた。
7. 同上、68頁。本文中に付されたルビは省略した。
8. 同上、79頁以下。本文中に付されたルビは

省略した。

9. 山口淑子『戦争と平和と歌 李香蘭 心の道』（東京新聞出版局、1993年）、41頁以下。
10. 山口淑子『「李香蘭」を生きて』（日本経済新聞出版社、2004年）、60頁。
11. 四方田犬彦編『李香蘭と東アジア』（東京大学出版局、2001年）。
12. これには「大ばくち 身ぐるみぬいで すってんでん」というヴァリエントもある。山口猛『幻のキネマ満映 甘粕正彦と活動屋群像』（平凡社、2006年）、300頁参照。
13. 『李香蘭 私の半生』、305頁以下。

（受付日：2013年9月25日）